

看護と言葉の接点

田中 美恵子 (東京女子医科大学看護学部)

看護と言葉の接点を考えるとさまざまあります。たとえば、看護学の学問を構成している「言葉」、患者様とやりとりするときの「言葉」、医療看護情報を整理する「言葉」、質的研究などでデータとされる「言葉」等々です。ですが、考えてみますと、言葉と全く関わりをもたない仕事を見つける方が実は難しいのかもしれませんが。

ご存知のように、ナイチンゲールは、「看護は art であり、science である」と言いました。この看護の art の部分を育てることに大きく関与しているのが、liberal arts であると思うのです。そしてその liberal arts を支えているのが、人間の思考を司り、人を自由にするものとしての言葉なのです。

「言葉をもち、ひとり一人違った物語を生きる人間に接する方法としての art を鍛えるのに、liberal arts はとっても役立つ！」というのがここでの1つの結論です。

一方、看護の臨床をみてもみると、そこは「語り」に満ちています。言葉が繋ぎ合わされ、ナラティブ(物語・語り)となる時、さらに大きな力が発揮されると言われます(野口)。この物語を読むというのには、追体験という作用が含まれています。それによって、患者さんの物語を理解することができるのです。では、こうした理解を支えているものは何か、という問いがあります。トラベルビーは次のように述べています。

「たいていの人々は、いつの日にか、そしていろいろな程度に、喜び、幸福、満足、驚き、愛、同情としてこうした感情を体験するだろうし、また嫌悪、憎悪、欲望、怒り、羨望、嫉妬、それに似た感情の衝撃を感じるものである、ということもまた正しいのである。共通の生活体験は、各個人の独自性の障壁ばかりでなく、文化的な言語的な障壁をも超越しているから、十分理解できるのだが、それと同様に感情もまた十分に理解できるものであり、そこにはあらゆる人類に理解される言語という一面が含まれている。

愛とやさしさと同情は、あらゆる文化圏や社会的背景の人々によって、容易に理解できるものである。愛の言葉は普遍的であって通訳を必要としない。」

ここでトラベルビーが感情や欲望について述べているのは示唆的です。そこには、言葉を通じた共通理解の素地としての身体が見え隠れするからです。身体を有することに根差した共通の生活体験をもとにして、他者の物語を理解していくこと、それが看護の art を構成するもののひとつなのではないかと思われます。そして、そのことに、liberal arts 教育は確実に貢献すると思うのです。

Seymer, Lucy R. (ed.): Selected Writings of Florence Nightingale. The Macmillan Company, New York, 1954, p.355.

野口裕二: 物語としてのケア—ナラティブ・アプローチの世界へ, 医学書院, 2002, p.20.

Travelbee, Joyce. (長谷川浩, 藤枝知子訳): 人間対人間の看護, 医学書院, 1974, p.40.